

私の中国語の授業

天 野 節

1. はじめに

私は、既に中国語教員（大学の非常勤講師）として 15 年間中国語の授業をしているが、自分の中国語教授法に「こうした方法でなければならない」という強い確信を持ってはいない。当初から、中国語の授業する以前の自分の体験¹を踏まえての試行錯誤の連続であり、定年を迎える現在でも、新たな方法を模索中である。

その理由は、第一に、中国語の授業は、自分の中国語授業体験と異なることである。

一つは、私が教わった当時の教員と自分とは異なり、学習方法の解説などしないし、文法事項の解説もほとんどなく、ひたすら発音練習をさせ、人としても威厳に満ちていた。二つには、週 2 コマの初級学習一年後に、文学書などの原書を読まなければならないというように、授業展開の順序・段階が確立していなかった。三つには、現在の学生とは異なり、それなりに中国語に対する関心・興味があり、自発的に学習に取り組むなど、積極性があったと思う。四つ目には、中国語学習環境・条件が異なることである。国交が回復されていない時期で、学習者が極めて少なく、学習書、辞書、学習器具がほとんど無かった。

だから、現代の学生に自分の体験したような授業をすることができない。では、既に学習者が増加した今、教授法の経験も蓄えられているはずだから、

¹ 私は、30 年以上、自分の学習塾（補習塾）で中学生に英語と国語の授業をし、時期はさまざまだが、3 年半、中国の大学で日本語の授業をした。また、7 年間日本語学校で外国人に日本語を教えてきた。それから、中国語の授業をするようになり、今年で 15 年目である。

それを先ず研究すれば良い。しかし、自分の怠慢で中国語教授法の授業体験をしていない、授業展開の方法についての文章を読んだことが無い、他の教員の授業参観したことがない、さらに、授業方法について教員同士で意見をまともに交わしたことがないのである。

授業をどのように展開したら良いか目途が立たず、緊張で押しつぶされるようになっている時だけは、授業の実践指導書を読みたい、先輩の先生方の授業を覗きたいと思ったことがある。もしかしたら、こうした方が私の他に居られるかも知れないという危ういかすかな思いで、厚顔無恥にも私の経験を披露してみようとこの文章を書いた。

最初に、授業準備、授業の展開、テストや成績評価をどのように行っているかを述べ、次に、どうしてそうしているのか経過・理由を述べる。最後に、抱えている問題点を述べる。

2. 授業準備

2.1. 教科書

中国語の授業の対象、学生の学部、年次が明確になるのは、授業開始年度の前年 11 月頃である。対象がはっきりした時点で、その対象を考慮し、手元にある教科書の見本及びその頃までに送られて来た教科書会社の教科書に目を通し、①単語に日本語の意味が付けられていないもの、②文法事項が対象にあっているもの、③本文がより自然なもの、④練習問題がついているもの、という基準で選択し、注文する。しかし、連携授業の場合は、相方の先生と打ち合わせて決め、教科書が指定される授業については、上記の限りではない。

2.2. 授業準備

12 月 25 日以降 1 月末までの時間を使い、教科書の予習と課毎の「授業メモ」を作成する。「授業メモ」に書くのは、①単語・語句（ピンイン²を付け

² アルファベットで表記された中国語の発音表示で、母音の上に四声という 4 種のイントネーションの記号をつけたもの。

て)、②文法事項の自分なりの解説と文例(文例は必ず中国人が書いたと思われるものから採る)³、③予習復習の課題、である。

また、初回で行う授業案内の配布用プリントを作成する。項目は、イ)自己紹介、ロ)使用教科書、ハ)辞書、参考書、ニ)初級者には、中国語の案内、中級者には、初級で学んだ文法構造、である。

3. 授業の展開

前期・後期それぞれ13回～14回あるが、初級中国語は、学習案内に1回、2回～4・5回に発音の基本を学習し、後は教科書に沿いそれぞれの課の学習に入る。中級は、2回目から各課の学習に入る。

3.1. 最初の授業

3.1.1. 授業案内

2.2で作成した授業案内を配布、初級の授業の場合には、中国語案内⁴を加え、中級の場合には、中国語の文の構造を復習する。授業案内は、授業の進め方、参考書・辞書の案内、テスト、出席、成績評価の方法、がその主な内容である。

³ 参考書は、

相原茂・石田知子・戸沼市子「WHY?にこたえるはじめての中国語の文法書」(同学社)1999年

呂叔湘主編・牛島徳次・菱沼透監訳「中国語文法用例辞典」(東方書店)2003年
刘月华他著《实用现代汉语语法》(商务印书馆)2007年

大東文化大学中国語大辞典編纂室・編「中国語大辞典」(角川書店)1984年

伊地智善継編「中国語辞典」(白水社)2002年

中国社会科学院语言研究所词典编辑室編《现代汉语词典第5版》(商务印书馆)2005年

赵新・李英主編「学汉语近义词词典」(商务印书馆)2009年など。

⁴ 孟浩然「春眠」を掲げ、高校で学習した漢詩と現代中国語は、字形、発音、文字の意味などの点でどう違っているか等説明する。そして、「中国語は漢字を文字として用いるから学習し易い」という学習に対する安直感に注意を与えると共に、発音学習を大事にするよう伝える。また、授業の進め方、課題、テスト、成績評価方法を説明。

3.1.2. 出席

このうち、出席については、各期とも欠席を4回したら、その時点で授業に参加することを許可しないと説明する。ただし、4回の欠席のうち、常識的に止むを得ないと認められる欠席（証明書提出を要請する場合がある）については、授業に継続して出ることを許可する。

3.2. 通常の授業

授業は、チャイムが鳴る5分～10分前に教室に向かい、チャイムを聴いてから、出欠を取る。授業メモの配布、課題の返却を終えて、前回の復習をする。主に発音の復習をし、文法事項に簡単に触れて、当日予定の内容に入る。

まず、新出語句の発音と意味の確認を行う。学生に前もって調べて来させるか、大多数が予習していない場合は、当てる順番を決めて置き、最低限、指名された学生が自分が当たる単語・語句の意味を調べさせてから（大抵5分間）、指名し、新出単語・語句を発音し意味を言わせる。

一つの語を後について3回発音練習し、学生だけで声を出して反復練習させる。もう1回後について発音練習させる。

次に本文を同じように発音練習する。

それから、文法事項の説明をする。教科書の例文は、2回繰り返し発音練習し、学生が発音し、日本文にする。

いくつかの文法事項すべてが、こうして終えた後、本文をもう一度発音練習し、一文ずつ読んで訳させる。

時間に余裕があれば、本文が会話文の場合（初級教科書は会話文が多い）、学生を二つに分け役割分担し、会話を練習したりすることもあるが、ほとんどそうした余裕はない。

一課を終えると、課題を出す。①本文をピンインを含めて書き写し、日本文で意味を書く。②練習問題を行う。これらを次回授業の際、提出させる。

3.3. テスト及び成績評価

各期とも最終授業の1週間前にテストを行い、最終授業の時、テストを返却し一人ひとりの学生に評価を伝え、前期末であれば全員に休暇中の課題⁵を出す。

3.3.1. テストの内容

テストの形式は、教科書にもよるが、大体4課～7課分の学習内容から、必ず教科書の文を用いて、6種類出題する。1)単語・語句（日本語を中国語で書きピンインをつける）、2)括弧内の指示に従い中文を書き換える、3)ピンインの文を中文で書き、意味を日本語で書く、4)日本文を中文にする、5)日本文を中文にし、ピンインを付ける、6)前期のテストには授業に対する意見・提案・感想を書く、後期には中国語の授業を通じて得たものは何かを書く、というものである。

そして、テストに出題する中文をテストの2週間前に学生に渡し⁶、1週間前にそれらについての質疑応答し、テストを行う。

3.3.2. テスト実施

テスト実施当日は、出席簿順に席に座らせ、①実施時間50分中トイレに行けない、②携帯電話の電源を切る、③中国語の見えるものはすべてカバンの中に入れる、④鉛筆のケースのチャックは、テスト中必ず閉じる、⑤腕の袖は10センチ以上上げておく、などを徹底させて行う。

⁵ この課題は、教科書の本文をピンインを付していない中文にし、それを朗読できるようにして来るというもので、休み明けの最初の授業で学生一人ひとり、朗読テストを行う。

⁶ これらの中文を 1)訳せる、2)ピンインを付けられる、3)訳した日本文を見て中文にする、4)声を出して発音練習する、という復習・テスト準備をすることという指示を書き添える。

3.3.3. 成績評価の方法

出席率 20%＋課題 10%＋テストの成績 70%。

4. なぜこうしているのか

4.1. 2.1. の教科書について

教科書の選択基準で、まず第一に、中国語の意味が付けられていないものを選ぶのは、中学生に英語を教えていた時の経験から得た知恵で、学生が中国語に接する機会を少しでも多くするためである。単語・語句の意味が書いてあれば、辞書を調べないし、予習もしない。したがって、学生がそれらに辞書で接する機会を奪ってしまう。言葉を覚えるには、できるだけ接する機会を多くすることが第一だと思う。さらに、辞書を調べさせるのは、単語・語句について複数の意味や文例や周辺の単語にも接する機会があるからである。

第二に、文法事項は、初級、中級などに分かれており、自分が初級の授業をした学生が、中級も自分の授業を選択するとは限らない、つまり連続性がないから、必要な事項が網羅されているか検討する必要がある。

第三に、本文があまりにも文法事項に偏ったものだと、自然な中国語ではなくなっているという場合を注意して検討する。

第四に、練習問題がないと、日々学生が何を理解していないか、何が定着していないかわからないし、かといって練習問題を自分が作成する時間を割きたくないからである。

4.2. 2.2. の授業メモについて

こうした授業メモをなぜ作成するのか。当初、初級だけの担当で、使用教科書⁷は、新出単語・語句を別記していないものであり、文法中心に構成され、文例も最低限記載されたものであったので、英語・日本語の授業の経験から、学生には先ず単語・語句の発音と意味の確認をしなければ先に進めないと考

⁷ 牧田英二・楊立明「新編・例文中心初級中国語」（同学社）1997年

え、それらを課毎に拾い出し、ピンインをつけて配布していた。そして、文法事項の説明は、版書してから行っていた。しかし、板書に時間が取られ、発音練習などに支障が出、授業の流れも阻害された経験を踏まえ、自分の考えた文法の解説と教科書と異なる文例をメモに加えた。教科書の文法事項の解説は、教科書によっては全く解説が無いが、一面的なものと感じられるものもあるので、自分の教学経験を踏まえてより判りやすいと思われるような事柄を加えたのである。文例は、どんなものでも誤りを避けるため、自分で作成せず、中国人が書いたと思われるものから採る。

4.3. 3.1.2. の出席について

欠席を各期とも3回までにし、4回目は許さないと決めたのは、欠席数を制限しなかった時、時々出席しては私語を多くする学生に度々出会ったからである。授業の内容を理解できず、熱意に欠け、しかも、他学生に迷惑を及ぼすので、こう決めた。こうした結果、席順を決めなくとも、大声で怒鳴らなくとも、授業は正常に進められるようになった。しかも、こうしたことで年を経るごとにより意欲のある学生が増えているように感じる。

4.4. 3.2. の通常の授業について

授業をチャイムと共に開始するのは、授業の緊張感を確保するためである。語学の授業は、多くは「なぜか」、「どうしてか」が判明していること、つまり「このように表現するのだ」ということをあれこれの方法を通して反復練習することにより、次第に深く定着させて行くことが、かなりの学習内容になるのではないかと思う。したがって、相当退屈な授業なのだ。学習者の緊張の糸が切れてしまうと取り組み難くなる。だから、授業は学習者をリラックスさせると共に、同時に、ある程度の新鮮さを感じる作業の連続を作らなければならないと思う。したがって、開始時間の厳守は当然のことで、その後の授業形式も、だらだらと文法説明ばかり続けたり、単に教員側の興味に基づいたおしゃべりはしない方が良いと思う。

課題を出し提出させるのは、復習の作業を全員にやらせるためと、練習問題を授業で解説する時間が思うように取れないからであり、同時に、学生の理解の程度、どんなところでつまづき易いか明確になるからでもある。

外国語の発音学習は、きわめて重要である。発音練習ではネイティブの声を学生に聞かせるか否かは、言うまでもなく聞いてもらったほうが良い。しかし、聞き取り練習には非常に良いのだが、DVD（CD）などの音声に続いて発音練習するというのは、多くの場合うまく行かない。ネイティブの発音者のスピードに学生がついていけない、聞きたい部分だけ聞くのに多少の時間がかかる、学生が発音しにくい部分だけその場で繰り返すことが困難であるなど、限られた時間の中では、無駄が多いと思う。だから、私の場合は、徹底的に自分の発音の正確さを保つ努力をしつつ⁸、私の生の声を頼りに学生に発音練習させている。非常に臨機応変に対応できるからである。

4.5. 3.3.1. のテストについて

テストの実施は、学生の学習評価をすることだけに意味があるのではなく、学生が受験の準備をする際に更に学習内容を深く復習するということがあり、更に、教師の授業の点検にもなっているのだが、このテストの「復習」効果の点では、この出題方法は、的を絞った集中的な復習ができそうだという気持ちにさせるのではないかと思った。また、学生が実際に行えばその効果は確かにあると考えた。

一方で、出題に用いた教科書の文を前もって学生に渡すのは、何の準備もなしに出題すると、恐らく全員近く不合格となりかねないという懸念があったからでもある。実際、当初は出題範囲だけを伝えておいてそうしたのだが、点数操作をせざるを得なかった。そこで、このようなテストを行うに当たっ

⁸ 毎日1時間半「聊齋志異」の原文と現代中文訳を読む。時間の余裕さえあれば、ネットで中国の映画、ドラマを見る。（高清电影电视剧-搜狐视频）大抵の作品が字幕付きの画面になっている。また、最近では、中国の衛星放送テレビも見ている。アンテナさえ建てれば、大体40数局見られる。だからと言って、自分の発音が正確かどうかは別の問題だが、正確な発音ができるように努力している。

ては、いくつかの懸念があったのだが、結果的には、より多くの学生が復習し、テスト結果もかなり良いものになったので、以来こうしている。

4.6. 3.3.2. の成績評価について

通常授業内で行うテストの成績だけに基づく成績評価は、当初は特にテスト内容が学生の学習水準と適合していなかったこともあり、ほとんどが不合格点であった。それで、出席率を点数化して加えたりして、全体の成績の散らばりをグラフにした時、標準形になるように操作した。課題を学生に提示していなかった時には、この分の点数化はなく、非常にあいまいな評価になったが、幸いにも、学生の出席率がよく、特別な学生を除けば、ほぼ全員が単位取得ラインを超えた。だが、自分の授業の仕方の良し悪し、学生に対しての適不適をさて置き、学生に対しきちんと説明できないようないい加減な基準で評価を決めることには罪悪感を覚えた。

次に、課毎の課題を出すようになり、これを点数化したが、初めは、出席率 30%、課題 10%、テスト 60%としたが、どう見ても、学習内容をあまり習得していないという学生も含まれてしまっていた。テストの難易度は自分の出題のやり方ではあまり操作できないと思い、20%、10%、70%に変え、より主観的判断を避けられるものにした。

5. 問題点

問題点の一つは、中国語は「英語以外の外国語」と呼ばれてはいても、英語という外国語と対置したときには、言い方は以前と変わっても、状況は、やはり第2外国語であるということ。二つ目は、この第2外国語をどこまで教えられるかという問題。三つ目は、教員と学生の意欲の問題である。

5.1. 中国語は「第2外国語」？

「英語以外の外国語」の授業は、コマ数が少なく、さまざまな学習段階、さまざまなアプローチ、講読、文法、会話、作文などに合わせた授業展開が

できない。だから、学生が望んでいたとしても、原書で文献が読める、学習した言語で母語とする人たちと会話ができ、書いて意思を伝えられるところまで学習するのは、語学の専攻生でない限り相当難しい。

だから、「英語以外の外国語」の授業の目標は、かなりあいまいである。したがって、学生は、「単位を何とか取得できる程度で良い」とか、「大体どんなものか知ればそれで良い」とか、「外国の映像をちょっと見られれば良い、音楽に触れられれば良い」などといった及び腰の学習態度の者が多くなる。教員のほうでも、「自分の研究活動の方が大事だから、中途半端な学習態度の学生には、いい加減で良いのだ」と決め付けてしまったりするのではないかと思う。

大学の「英語以外の外国語」の授業をこんな風にしたのが、大学で中国語を教え始めた頃の私の感想であった。

私は、研究活動も大いにやりたかったが、いい加減な仕事をしてその相手からお金を頂くことに耐えられないと思った。確かに、学生に授業をするというのは、目標が定かではないので「終わりのない旅」に出たような感があったのだが、学生には自分が汗しているところを見てもらいたいと考えた。実際、自分がやってきたことは全く児童に等しいかもしれないのだが。この点につき読者は如何にお考えだろうか。

5.2. どこまで教えられるか

やってみなければわからない。これが私の結論である。中には、半年学習ただけで、中国語検定試験4級に合格する学生も出たり、中級程度の教科書を非常に正確に発音できるようになり、きわめて正確に日本訳をする学生も出たりする。学生との共同作業とも考えており、今は相手次第でもあると思う。

5.3. 教員と学生の意欲

非常に問題であると思うが、大学教員はたとえ研究活動が主ではあっても、

教学は外国語関係に携わる者にとって、まともにやれば自分に帰ってくるものが多いと思うので、自分としては精一杯やりたい。学生の意欲については、語学学習特有のメリットがあり「自分自身を獲得する修行にもなり得る」、「外国を自分自身の目で覗ける」などと思い付いたことを勝手に語りかけ、静かに彼らの「意欲」を待っている。

6. おわりに

中国語の授業をこれまで行って来て、感じた戸惑いは、常に、「この授業のやり方でいいのか」ということであつた。だから、中国語教授法についての経験交流、あるいは意見交換会などが必要であると思う。

これは現状をあるがままに認めての思いであるが、それ以前に、大学のすべての講座の中で、英語以外の外国語授業の役割を再度吟味し、教学内容を再検討する必要があるのではないかと考える。